

---

# 掃除屋

ひねくれもの

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

掃除屋

### 【Nコード】

N5523N

### 【作者名】

ひねくれもの

### 【あらすじ】

あらすじ書くとダメだと思うので……

**（前書き）**

前回の小説は無事、間に合いました。

次は、短編です。次回は長編になるのかなあ

「この男を、国外追放にする！」

ワァー！　ワァー！

裁判官の判決に対する人々の歓喜の声。

「ちょっと、待ってくれ！　俺は、悪いことは何もしてない！　本当だ！」

「汚い罪人には罰を。それがこの国の鉄則だ。おまえは罪を犯した。言い訳など見苦しいぞ」

「待ってくれ！」

そういいながら、男は退廷させられていった。

国境。

「もう、二度と帰ってくるんじゃないぞ」

「俺は悪いことなんて、何もやっていない」

「またそれか。聞き飽きたな。本当に、罪を犯したくせに言い訳など、どこまで汚いのだ。お前は」

兵士がそう言うのを背に受けながら、男は歩いていった。

その男は何日も歩き続けていた。

国外追放になり国境の関所を締め出されてから、ひたすら歩き続けている。

「どうすればいいんだ。俺は……」

男はボロ布一枚を身にまとい、何も持つてはいなかった。  
今日まで生きてこられたことさえも奇跡に等しい。

川の水を飲み、名の知らない草を食べ、実を食べ……。  
しかし、さすがに限界に来ていた。今日のうちにどこか街に着かなければ危険なことは男が一番良く分かっていた。

だが、今日この瞬間まで街はおろか、人影さえ見なかった。

しばらく歩いていると、丘に出た。誰もいないし、岩さえも落ちてない、石と草だけの丘だった。

「そろそろ、暗くなってきたな。どうしようか」

風が吹いた。草が揺れる。風の音にどことなく寂しさを感じさせる。

丘の天辺に着くと、周りの風景が一望できた。遠くには海が見える。そして、その手前は見渡す限りの草原。

そして、真上には星空。

こんな綺麗な景色の中にいるのに、死にかけている自分が滑稽に思えた。

「あれ？ あの光は……」

星空から地上へと視線を下ろすと、草原の中に明かりが見えた。ほとんど暗くなってきたている周りに比べて、明かりはあまりにも目立っていた。

「丘が邪魔で見えなかったのか」

男は嬉しさを隠せないでいた。

本当はこの暗さならば歩くことを避けるべきなのだろうが、見えてしまったならいくしかないと思ったのだろう。男は早足で光のもとへと向かった。

近くに来てみるとなかなか大きな町だった。

レンガでできた壁の家が両脇にあり、不揃いの石が道を覆う。そして、道沿いにずーっとガス燈が続いていて、男の住んでいた国とは趣のまったく違う国だった。

何か、暖かいものを感じるような場所だった。

夜なので、人がいないのはもちろんだが、人がいなくてもまだいたときの暖かさが残っているような感覚がした。

まるで、風景の中に人が溶け込んでいるような。

とりあえず、今は泊まるところを探さねければいけない。男はそう思った。



今まで、大地というベッドに空という布団を被ってた男にしてみれば、石畳のベッドに街灯の布団などましにさえ思えたかも知れないが、久々にまともな寝床につきたいという気持ちはもちろんあった。

しかし、男は金どころか持ち物が皆無に等しかったため、男がいた国であつたならどこかに泊まるなどできるわけがなかった。

でも、この街は自分の国とは違う。ひよっとしたら、泊まれるかもしれないという根拠の無い思いがあつた。

コンコン、失敗して当たり前という気持ちを持ちながら、ノックする。

「はい、何でしょう?」

声と同時に顔が出てきた。顔はおばさんという歳だったが、その割には若い声の持ち主である。

外に立ってるのが誰かとも確かめないで、戸を開けるなんて男には信じられないことだった。

「あの、今晚……。ここに、泊めていただけませんか。お金も何も持っていないんです。すみません……」

男は、いろいろなことを考えた。扉を閉められるのか。

もしくは前の国のように裁判にかけられて、また追放だろうか。今度は死刑かもしれない。

そんな、考えが頭を巡る。

「困ってる人を見捨てるなんてできないわ。服もボロボロじゃないの。早くお入り」

男は泣きそうになっていた。目の前で起きてることが信じられなかった。

男の国では、こんな時間に戸を叩いて「泊めてください」なんて人は一人も見たことはなかった。

仮に、そういう人が来ても、男は自分が人に今のこの人のようなことができるとは思えなかった。「何を言っているんだ」そう言っ

て追い返しただろう。

自分がしないことを人にしてもらっているのが、男にはとても申し訳なかった。

「ありがとうございます！」

男は涙を堪えながらそう言った。

「夕飯は食べたの？」

街灯と趣は似ているものの光量が違うランプが光っている。

その部屋は、台所兼リビングと思われる部屋であった。

男は椅子に座っていて、おばさんは台所に立っている。しかし、男はおばさんの優しさ、初めての待遇に戸惑っていた。

「いえ、まだですけど……。迷惑だろうし、いいです」

「何言ってるの。この街じゃ、そんなことを気にする人なんて一人もいないよ。あんたお人好しだね。今、作るからちよつと待ってな」

男は悩んでいた。自分はお人好しなのか？ そんなに、良いものなのか？

「でも、どうしたんだいこんな時間に一人で外歩いてるなんて」

「それは……」

そう言うと、男は俯いた。国外追放になった人間なんて今すぐつまみ出されるかも。今もそんな考えが男の中にあっただ。

「まあ、答えにくいことなら、別に良いさ」

そう言いながら、おばさんはまた、鍋に向かっている。

コトコトと鍋の音だけが流れる時間がしばらく続く。すると、すぐに良い匂いがしてきた。

男は、またも泣きそうになっていた。

何もかもが許されて何か暖かいものに包まれている感覚。

それが、嬉しいのと。

もうひとつは……。

自分がやった罪のことを話せばこの空間が壊れてしまうのかと思うと悲しくて。

もちろん、男は自分のやったことを悪いとは思ってないままで、その気持ちは変わってなかったが、自分の国の人と同じように他の人はそう思わないんだろうと思うと怖くて言えなかった。

「できたよ」

そう言ったかと思うと、男の前に食器が次々と並べられて、目の前にあるお皿の中にはとても暖かそうな食べ物がたくさんあった。

「いただきます」

男はそう言いながら、食べ物に手を付けた。

それは、今まで食べたどんな食事よりもおいしかった。それは、お腹が空いていたからかもしれない。もしかしたら、嬉しかったからかもしれない。

「よく食べるねえ。よっぱどお腹が空いてたのかい。可愛いそうに」

おばさんはそう言いながら、男の正面に座って眺めていた。

「ご馳走様でした」

男がそう言い、食べ終わる。

ちょうどその時、階段から誰かが降りてくる音がした。

「おばさあん。掃除終わったよ」

「ご苦労様。もう、休んで良いわよ」

そうおばさんが答えると、少女の目は男の方へと向いた。最初は驚いた目をしたが、すぐににこやかな顔となり、主人公の隣へと座る。

「はじめまして」

そう少女は笑いながら言う。しかし、男はこの少女に好感を持てなかった。

## 掃除

汚い物を、集めて追い出す行為。それは、自分の国が自分にしたことと同じではないか。男は、もとの疑い深い性格のせいか、こんなことを考えていた。

「……そう、ですね……」

この一言を聞いたときに、少女は別に不快な顔もせず、

「まあ、今日は疲れてると思うからゆつくり休んでね」

そう言って、また二階へと上がって行った。その少女の気遣いに

気付いた男は、自分は邪推してしまっただけなのかもしれない、と後悔の念に苛まれた。

その日は、部屋を用意してもらい、男はベットの上で安らかに寝た。こんな幸せなことがあっていいのだろうか、などいろんなことが頭を巡ったのだが、今までの疲れもありすぐに眠りに落ちた。

次の日、起きて窓を開けると少女の声がどこからした。

「あ、起きたんだ。おはよう」

男はどこにいるのかと周囲を見回す。

「上だよ」

そう言われ、屋根の上を見ると少女は煙突掃除をしていた。

「昨日は良く眠れた？ 上がってきなよ。街の景色が見渡せるよ」

まだ、少女に対するとどこかしの嫌悪感が残っていたが、昨日の反省もあり男は屋根に上る。

「私はね。これが仕事だから、いろんな掃除をするの」

少女はそんなことを話し始めた。男は、少女へと注意を向ける。

「でも、たまに思うんだ。今、私が掃除している汚れは本当に汚れなのかなって。

掃除をしているといろんなものを見るの、今の煙突だって、煤が集まって黒くなってた。確かに、私たちから見れば汚れだけど、その煤は煙突を彩取りたいだけなのかもしれない。

そう思うと、私のしてることは何なのかなって

君は、何があつたのかな？」

男は驚いた。まさか、昨日の件はまだしもここまで見透かされているのかと考えた。

男は、自分で話そうと決める前に口が動いていた。



「俺は、自分の国で人を助けてしまったんだ」

少女は、無言で聞いている。

「この国の人ならば、なんでそれがいけないのか？　と思うかもしれない。

情けないことに、うちの国の人には人助けが苦手なんだ。

たくさん周りに人がいればいるほど、誰かがやってくれると思つて手を引いてしまう。

もちろん、中には人を助ける人もいたんだ。でも、もし自分がその人を助けられなかったときに、他の人が助けてしまったらどんな思いをするか？

とても、うしろめたい気持ちになる。そんな理由で俺の国にはこんな決まりが作られた。

『人助けをしてはいけない』

馬鹿なこと、とおもふと思う。

そして、俺はこの決まりを犯した。だから、国を追われて……」

今まで、黙っていた少女が口を開いた。

「それは……可哀相に……」

男の今までの経験からは、その言葉は嘲笑に聞こえてしまった。しかし、すぐに思い直す。

この人たちはそんなことはしない。本当に、心から言ってくれてるんだ。

男は気が付くと泣いていた。今まで、泣きそうになったことはあっても泣いたことはなかったのに。

「安心して。この街ではそんなことはないから。何なら、この街に住んじゃう？」

少女はそう言いながら、嬉しそうに笑う。

「まあ、今すぐ決められることじゃないからゆっくりね。別におばさん全然気にしないと思うわ」

男はただただ泣いていた。少女は立ち上がり、どこかに行こうとする。

しかし、少女は足を滑らしてしまった。屋根の上で。

男はすぐに気付き手を伸ばす。寸でのところで少女の手を掴むことができた。

「危ない！」

同時に、後悔の念が襲ってきた。あの法律ができたあの日から、今まで自分に何度も言い聞かせてきたのに、また人を助けてしまった……。

「ありがとう。助かった……」

男の耳に入っただのはこんな言葉だった。その言葉は、罵倒でも文

句でもなかった。男が前に助けたときは助けられた人はすぐに通報した。

「ありがとう」

昔は、人に何かしてもらったときに自然に出た言葉

でも、あの法律ができてから聞くことのなくなった言葉

聞かなくなってしまった今だからこそその言葉の重要さがわかった。

そして、自分は間違っていないかったのだ、とそう思うこともできた。

「本当に、ありがとう。助かったわ」

少女は男に言う。今の出来事で決心のついた男は少女に言う。

「俺、この街に住むよ！」

少女は、またもにこやかに笑いながら言う。

「良かった。嬉しい。」

じゃあ、この街に住むならこの街のただ一つの決まりを守ってね。  
それは

『他人には、優しくしなければいけない』」

数日後、男は草原を歩いていた



(後書き)

ポイントつけてくれた人がいたみたいで。  
そういうの、本当に嬉しいので厳しくてもいいから、  
どんどんやっちゃってください

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5523n/>

---

掃除屋

2010年10月9日06時02分発行